

公衆電話ボックスのうつりかわり



1900年(明治33年)

初めて京橋際に建てられた、公衆電話ボックス第一号。六角錐形、白塗りのモダンな建物で「自働電話」と呼ばれた。



1911年頃(明治末期)

明治末期の赤塗りの六角形ボックス。全国で200カ所に建てられ、庶民の電話として活躍した。



1927年(昭和2年)

四角形でグレーの昭和初期のボックス。窓も線も細く、しゃれたスタイルで親しまれた。



1945年(昭和20年)

被災地に建てられた組み立てバラック式ボックス。ガラスの節約で窓は小さく太い格子が入り、暗い感じであった。



1954年(昭和29年)

初の銅製ボックスがお目見え。クリーム色のボディと赤い屋根から“丹頂形”と呼ばれた。戦後色を一掃、街角を彩った。



1964年(昭和39年)

東京オリンピック大会会場付近で試用し、昭和44年から全国的に使用された組み立て式ボックス。組み立て、解体が簡単で、四方とも透明なガラスであり、盗難・いたづらなどの防止に役立っている。



1985年(昭和60年)

街の景観になじみやすく、ガラス以外の部分は、ライトブラウン、ダークブラウン、グレーのカラーパリエーションに。旧形ボックスよりも広く、耐震、防暑、遮音、防雨、照明等に気を配り、使いやすさをさらに追求している。



1991年(平成3年)

デジタル公衆電話に接続する携帯端末操作大型テーブルを標準装備し、電話帳ホルダー、腰掛け等の内装設備も充実。さらに通気口の拡大や照明のアップ等快適性をも備えている。